2021年8月4日
読売新聞

「認知特性」生かす指導

十人十色 7

子どもたちの今

最適な学び 提供するには

見聞きしたことを頭の中で整理し、理解する「認知特性」は、個性と同様に一人ひとり異なります。それぞれに最適な学びを提供するためには、子どもの状況を理解し、個々に応じた指導方法を提案することが大切です。最近、学校現場や福祉施設などで行っている研修をご紹介しましょう。

子どもの特性に合わせた支援を考える研修の様子

まず「読む」「聞く」などが苦手な子どもの感覚を心理的に疑似体験してもらいます。▽漢字ばかりや、行がそろわず字間が等間隔ではない文章を「読む」▽「スマートフォンのデータをパソコンに移す」といった内容をカタカナ語を使わずに「話す」▽雑音の入ったCDを流しながら話を「聞く」――といった内容です。

こうして子どもの焦りやいらだち、不安に理解を深めてもらいます。その上で、子どもは▽何に困り▽なぜ困るのか▽どうしてあげたら良いか――を考えてもらうのです。

実際の指導では、以下の方法が使われます。見て覚えるのが得意な「視覚優位」の子には、図や模型を使うほか、全体像を示してから細かい部分を指導します。聞いて覚えるのが得意な「聴覚優位」の子には、声に出しながら書いてもらったり、全体の各部分を順序立てて伝えたりします。こうした特別支援用の無料アプリも開発されています。

また、積極的な子には自主的な行為を褒めると同時に、聞き役に回る役割も担ってもらう。意志の強い子には、押しつけるより、決定権や選択権を与えて自分で決めさせるといった工夫も有効です。

認知特性や知的能力は、検査で客観的に知ることができますが、普段の教室での様子やノートの取り方、テスト結果などからも分かります。算数ではきれいにノートを取るのに、国語が苦手な場合は、努力不足ではなく、指導方法が合っていない可能性があります。

「漢字を覚える時に、声に出しながら書いてみたら？」「文章問題を解くときは、絵や図を一度書いてみるといいよ」などと、様々な方法を具体的に提案する。その中から子ども自身が試し、合う方法を選んでいくことが、子どもの達成感と自信につながっていくと考えています。

（発達支援塾アットスクール代表　鈴木正樹）